

# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュ等が誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。



## G-600

38cmの3way同軸ユニットでミッドレンジにフェリックスダイアフラムを採用したホーン型ドライバーを搭載。ウーファーとツイーターは前号で紹介された最上位機種 PR-100インベリアルと同じものが贅沢に使われているため、コンパクトな同軸ユニットながら上位機種システムの音場がみごとに再現される。このユニットの原型になったのは1950年に開発された日本でも良く知られるG-610ユニットだが、こちらはPAシステムを目的に作られているため、中音域が強めに設計され、かなり大きな箱が必要となったため、通常の部屋でバランスが取れるように設計されたのがこのG-600ユニットのようだ。1959年から3年間ぐらいしか作られていないため、生産台数も少なく日本でもあまり見かけないが、最近の録音ソースも十分に対応する完成度の高いユニット。市場価格65～75万円/ペア

## 第3回 Jensen

ジェンセンのフルレンジユニット

ジェンセンの同軸ユニットの特徴としてウーファー部分の解像力が非常に高く、38cmタイプでもフルレンジに近い鳴り方をするので、ツイーターやドライバーとのつながりが非常にいい。また、スタジオモニターやコンシューマーを目的としているので比較的狭いスペースでも使いやすいユニットである。ほとんどのユニットが反応の速いフィクストエッジにこだわって作られており、コンディションの良い物は50年以上も経ってもエッジ交換も不要で、この先の数十年以上も使えるものばかりなのは驚かされる。なお、同社からはフルレンジユニットを搭載したメーカーシステムは発売されておらず、これらのユニットをうまく鳴らすコツは薄めの板で作られた響きの良い少し大きめの箱か、バックロードタイプの箱に入れることであろう。

本文/田中伊佐資

キャプション/岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影/田代法生



## H-530

1953年頃に開発された38cmの同軸2wayユニットで、ウーファー部分のマグネットがより強力になり、高域用に大きな金属製の大きなホーンが搭載され、外付けのネットワークが付属している。これにより反応が速くレンジの広い音場再現が可能になり、音楽ジャンルを選ばずに使え、ツヤのある弦の響きや軽快なピアノのタッチも良く再現される、鳴らしやすいユニットである。市場価格35～40万円/ペア



## TYPE-H

1944年頃に開発され、当初の38cmのカーブコーンのウーファーとドライバーの2way同軸ユニットで、その構造はTannoyにも影響を与えたようだ。ほとんどフルレンジのような鳴り方をするウーファーと高域ツイーターのつながりがすばらしく、まるでシングルコーンで鳴っているかの様。レンジはあまり広くないが、中音域の密度が高く生々しく色気のあるボーカルが聴ける。市場価格40～45万円/ペア



# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

# Jensen

ジェンセン



## P8RX

20cmのシングルコーンのフルレンジユニットで、薄くて張りのあるコーン紙と強力なマグネットが効率も高く、音の芯が太くハリとした音が特徴。少し大きめの箱に入れて使うと、ジャンルを選ばずに使え、完成度の高いユニットである。市場価格8～10万円/ペア



## H-222

1951年頃に開発された30cmの同軸2wayユニットで、マグネットは38cm同軸ユニットとほぼ同じ強力なものが使われているため、より反応の速い再生音を可能にしている。そのため、通常の30cm用の箱ではバランスを取ることが難しく、やや大きめの箱かバックロードの箱が必要となるが、非常にコンパクトなユニットながら高い潜在能力を持つユニットといえる。市場価格18～22万円/ペア



## RP-103

比較的大きなアルミダイキャスト製のホーンを持つツイーターで、フェリックス製のダイアフラムを採用するため、効率もかなり高く、とてもクセがなく滑らかな音色で100dbを超えるユニットにも楽々ついていく。同社のほとんどの同軸ユニットの高域用に採用されていて、Jensenサウンドの色付けをする上で重要なユニットである。市場価格7～8万円/ペア



## RP-102

大きなアルミダイキャスト製のホーンとフェリックス製のダイアフラムを持つツイーターで、RP-103をモディファイしたタイプとなる。このユニットはH-530同軸ユニットに同じものが搭載されている。市場価格9～10万円/ペア



同社のツイーターに採用されているフェリックス製のダイアフラム

例によって岡田さんの講義を聞き「アトリエJe-tee」へ出向いた。前回で取り上げたジェンセンはまずまずの反響があったという。ジェンセンは15インチの同軸フルレンジユニットがつとに知られている。これをあえて隠し球にしたのがよかつたのだらうと思った。なので今回いよいよジェンセンの立役者、同軸ユニットが登場となる。ユニットがハダカで床に転がっている。ひとつがそのジェンセンの530。50年代前半のもの。もうひとつがもっと新しい、80年代のガウス3588。ナタリー・コールの『アンフォゲッタブル』をそれぞれから再生してみた。ガウスは鼻づまり声でジェンセンはすらすらとしている。かなり違うものだなと思っていたら、岡田さんはツイーターをわざと切っていた。その理由はウーファーの高域がどこまで伸びているかということとを私に教えたかったためだ。つまり530はウーファー一発だけでもけっこういける。

「ジェンセンの発想は、ウーファーをフルレンジのように目一杯の帯域に使って、足りない高域へちよこんとツイーターを加え、低域をエンクロージャーで補うということなんです。複雑なことをしていないから、音が自然でしょ」次にちゃんとツイーターを出してもうと、さすがにひとかき上が伸びてナタリーの声のみずみずしくなった。ユニット1個が床にごろりだから、ステレオ感ほ当然ないし、セッティングもへったくれもない。なのにその声質に引き込まれる。一緒に床に寝そべりたくなった。530のわきにタイプHという同軸もあった。これは40年代の製造。中央にドライバーが埋め込まれていて、ウーファーのコーン紙をホーンに見立てている。なるほどラップっぽい。私はポーカーという点ではこっちが好みだった。ミッドレンジが豊かでしなやか。女性ポーカー専用には欲しい逸品だ。530はもっと高域にメリハリがあつて音楽の守備範囲が広い。いずれにせよポーカーは点音源に限ると思つた。

ジェンセンの立役者、同軸ユニットが登場  
ハイファイ的で心地よいとろみは群を抜く